第９８回令和５年度

全日本盲学校教育研究大会・北海道大会

発表概要

【研究主題】

「新しい時代の創り手を育む」

～ 持続可能な令和の日本型盲学校教育の構築 ～

第１分科会（学習指導１）

〇視覚障害の特性に応じた学習の基礎・基本を身につけるための指導
〇コミュニケーション能力や表現力、発信力を育てる指導

個々に適した学びを促す授業づくり
～校内研究の成果や課題から～

北海道函館盲学校　　教諭　土屋　聡美

校内研究で令和４(2022)年度に対象とした児童生徒の授業研究の一部を紹介し、校内研究で得られた成果や課題を報告する。

「日本史・世界史・地理」における点字地図作成と触察教材作成の実践
ー地図の分解と教材教具の工夫ー

山形県立山形盲学校　　教諭　小林　多恵子

近年、一般の教科書では視覚情報を多く取り入れ、色やデザインも多様化している。地図を点図化するにあたり、情報の内容を精選したり、簡略化したり、場合によっては点図に表せず地図や図が削除されることもある。また、要素が入り乱れ複雑な点図が多くなったり移動などの動きを表すのに限界があったりする。授業では指導者の説明なしでは理解できなかったり、説明を加えても地図の全体像を捉え細部を理解するには時間を必要としたりと課題が多いのが実情である。
そこで、点字の教科書で１枚に表された地図を、ねらいに応じて複数枚に分けて点図化したり点図を触察教材に作り替えたりすることで、生徒がより主体的に触察し理解を深めていけるよう試みた。本レポートは、その実践の一部である。なお、実践１，２は地図を複数枚に分けて点図化、実践３は点図の触察教材化についてである。また、この取り組みは平成３１年度から令和３年度に実践したものである。

近年の塙保己一学園における読書活動推進について

埼玉県立特別支援学校塙保己一学園　　教諭　門矢　千波

本校には、令和５年４月１日現在、幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科・高等部専攻科の幼児児童生徒 95 名が在籍している。今回は、本校の司書および図書分掌の教職員を中心に行った読書活動推進の実践について報告する。

視覚障害特別支援学校における外国語活動・外国語の指導
～４年間の授業実践を振り返って～

静岡県立浜松視覚特別支援学校　　教諭　吉田　修一

先の学習指導要領改訂に伴い、2020 年度より、小学校では、「外国語活動」および「外国語」（以下、「外国語活動・外国語科」）が、必修（全面実施）となった。これを受け、視覚特別支援学校である本校小学部教科グループ（いわゆる「準ずる教育課程」のもとで学習を行うグループ）では、「全面実施」に先駆け、2019 年度より、「外国語活動・外国語科」の授業を実践してきた。この４月で、先行実施から４年が経ち、開始時に３年生であった児童が、４年間の「外国語活動・外国語科」を学び終えたところである。ここでは、この４年間の「外国語活動・外国語科」の授業実践について報告する。視覚に障害のある児童２名の学級における「外国語活動・外国語科」の授業での取組、題材や教材、言語活動の工夫などについて振り返るとともに、４年間の授業実践を通しての成果や課題についても整理していきたい。

文化に満ちあふれた学校づくりのために

大阪府立大阪南視覚支援学校　　教諭　西村　彰洋

芸術文化は、口伝・楽譜・音源などの形で過去から現在へ受け渡され、同時代の人たちの間で教え合いがなされる。学校現場で行われる芸術文化活動は、授業や課外活動において、合唱・吹奏楽などを筆頭に、複数人による活動によりその文化の受け渡しが行われている場合が多い。医療の発達・少子化・インクルーシブ教育の推進等により、視覚支援学校の在籍者数は全国的に減少傾向にある。人数がある程度多い学校では、多くの人による「文化の教え合い」が十分に行われるが、視覚支援学校の現状の在籍人数ではその輪が小さくなり、生徒が接する文化にも限界がある。このような状況において、生徒・教員を問わず多様な文化に接しやすい環境を作り、生徒が興味のある時にすぐ多様な文化に触れることができる学校にすること、つまり学校を「文化に満ちあふれた」状態にすることが、芸術科の教員に求められていると考える。この状態を作り出すには個人、授業、学校、外部連携など様々な立場・方向性から取り組むことができるが、この研究発表では、音源編集アプリ「garageband」および無料楽譜制作ソフト「musescore3」の紹介と活用例、また収録機材と舞台放送設備、多重録音の活用例を提示する。

音楽科における演奏技術向上を目指した取組
～スモールステップで身につける、演奏する力～

徳島県立徳島視覚支援学校　　教諭　仁木　悦子

音楽活動には「歌唱」「器楽」「鑑賞」「創作」等がある。取組の対象とした高等部普通科２年生２名は、担当を引き継いだ小学部３年生時には「音楽を聴くこと」、「歌を歌うこと」、「太鼓等の打楽器を演奏すること」が音楽活動の主であり、旋律を演奏する楽器には取り組んでいなかった。対象生徒たちが音楽を聴いたり歌ったりするだけ

でなく、旋律楽器の演奏ができるようになることで、表現できる音楽の幅が広がり、音楽活動の楽しさをこれまでよりもさらに多く体験できるようになるのではないかと考え、小学部３年生から取組を始めた。楽器は、個人で所有しやすく卒業後も身近に置いておきやすいリコーダーを選択した。生徒たちはそれまでに、吹き戻し笛や和音笛などを吹いた経験があり、「吹いて音を出すこと」については特に抵抗無くできた。しかし、指穴を押さえて吹くことに関してはこれまで経験が無かった。また、新しいことを受け入れたり定着させたりするためには、丁寧な指導や長い時間をかけての取組が必要であるため、まずは１音を吹けるようにし、そこから少しずつ音を増やしていくことで、旋律を一人で演奏することに繋げていきたい、と考え長期的に取り組んだ。

コミュニケーション力をつけるための国語科ステップ

福岡県立柳河特別支援学校　　教諭　田中　裕子

本校は明治 41 年に柳河訓盲院として開校し、大正 13 年に柳河盲学校となり、平成 22 年度からは肢体不自由教育部門・病弱教育部門を含む３部門を併せ持つ特別支援学校となった。母体が視覚障がい教育部門（以下「視覚部門」という。）とはいえ、年々幼児児童生徒の在籍は少なくなっており、視覚部門内で集団活動等を行うことも困難になっている。集団での経験の少なさに加え、視覚に障がいがあるため、会話中の相手の表情や反応がわかりにくい。そのため、反応を確かめながら会話を続ける自信がなく、積極的にコミュニケーションをとろうとする生徒は少ない。そこで、改めてコミュニケーション力をつけるための国語科の学習のあり方の見直し・改善について研究に取り組んだ。

第２分科会（学習指導２）

〇視覚障害の特性に応じた学習の基礎・基本を身につけるための指導
〇意欲を引き出す指導や気づきに繋がる指導、教材・教具の工夫

視覚に障がいのある片麻痺の児童に対する自立活動の指導について
～片手によるファスナー着脱の実践～

北海道帯広盲学校　　教諭　田口　大樹

本校は、今年度７名の幼児児童生徒が在籍している。盲学校に在籍している重複障害児童生徒数が増加傾向にあるが、本校は７名中６名が知的障害や肢体不自由等の障害を合わせ有している。そのため、より児童生徒の実態に合わせた指導が必要である。校内研修を通して他の教員が作成した教材・教具を使用した実践を発表し、全体に共有することで学校全体の指導スキルの向上を図っている。その中で、小学部在籍児童の自立活動の指導において自助具を作成した。その自助具を活用した実践について報告する。

手と耳で捉える光の性質
―体験的な学びを重視した全盲生徒の指導を通して―

秋田県立視覚支援学校　　教諭　藤田　由樹

本研究で取り上げた「光の世界」は、光が進んだ道筋を見て記録し、観察することでその性質を考察していく題材である。視覚的要素が多いため全盲生徒にとってはイメージ化が難しく、光が進む様子をいかに体験的に学ぶことができるかがこの題材の課題であると考えた。そこで、本研究では、生徒が体験的に学ぶことができる教材の工夫と、それらの教材を一人で操作し実験を積み重ねたことによる生徒の変容について報告する。

小学部段階におけるプログラミング教育の導入
～実践から見る成果と課題～

千葉県立千葉盲学校　　教諭　齋藤　洸樹

現在、本校小学部では１７名の児童が在籍している。本校においても、必修化となったプログラミング教育は実践しているが、視覚障害のある児童に向けたプログラミング教材は数少なく、実際の指導においても教材の選定に悩んでいるところが現状である。本研究では、視覚障害のある小学部段階の児童を対象に、フィジカルプログラミング教材を用いたプログラミング教育の導入を実践し、その成果と課題について考

察した。

「観察、実験でのイメージ化を図る教材・教具について」
～立体的なグラフ作成を通して～

静岡県立沼津視覚特別支援学校　　教諭　山形　和寛

理科学習における観察や実験は、子どもたちが主体的に取り組むことができる活動の１つである。しかし、それらの結果をまとめ、法則性や決まりを追究していくことに苦手意識を持っている生徒も少なくない。グラフ化することで実験結果を視覚的に捉え、思考していく手立てであることを意識し、考察を進めていくことは学習内容を理解するうえで必要不可欠である。これらの考えより、本校の中学部生徒（全盲）を対象とした、よりイメージ化しやすい立体的なグラフ作成を通じた授業実践を試みた。

全盲生の触察について

福井県立盲学校　　教諭　松井　弘恵

点字を使って算数の学習を進める上で、点図を読み取る能力は欠かすことができない（高村、2016）。もちろん、その後に続く数学の学習でも、より複雑な図形を読み取る能力が必要である。そのためには形や線のイメージをしっかり作っていくことが不可欠と考えられる。ただ、どんな人でもどんなことでも得手不得手があるように、イメージづくりが難しい、またしばらくそれに触れていないとイメージがうすれてしまう（このような状態を、本当にはイメージを確立できていない、というのかもしれないが）生徒の触察技術・能力が少しでも向上することを目指した実践を報告する。

可能性を信じて引き出す授業づくり

高知県立盲学校　　教諭　木村　はるみ

今年度、本校は小学部、中学部、普通科の児童生徒数合わせて 15 名、普通科を除くと８名となった。この在籍数は、全国的には少ない方かもしれないが、高知盲に私が着任してからの在籍児童生徒数推移から考えれば、多い方だといえる。比較的長く勤務してきた私だが、単一障害の児童生徒の算数・数学を担当したのは２クラス、のべ３名にすぎない。しかも彼らは視経験があり視覚的なイメージを持って教科書の図を触読できたり、視覚障害教育における基本的な配慮により保有視覚で学習できたりする児童生徒だった。
数年前、私は初めて先天盲の児童Ａの担任となり、初めて算数指導に取り組んだ。時は流れ、Ａを今度は中学部で数学担当として迎えることになった。Ａの心身の成長は嬉しく、感慨深いものがあったが、同時に学習の習得状況には大きな課題も感じた。Ａの課題を解決すべく、基礎・基本の学力というものを、どのように捉え、どのように生きる力にしていくか道筋をつけるための授業づくりに取り組んできた。
本研究は短い期間しか取り組んでおらず途中経過の実践発表にすぎないが、他校から

の意見や指導助言をいただくことで大切な児童生徒の可能性を引き出し、伸ばすことにつなげていくことができればと考えている。

盲学校における弱視児の保健体育科教育とＩＣＴの活用
―映像で自分の動きを客観的に理解し、課題を導き出す指導―

大分県立盲学校　　教諭　平田　　傑

盲学校における弱視児教育では、様々な教育活動でＩＣＴ機器を活用していくことが求められている。本校では、ＧＩＧＡスクール構想事業に伴い、タブレット端末（ｉＰａｄ）が整備されるとともに、個人が使用できるモニターが設置され、ＩＣＴ環境の整備が急速に進んでいる。本実践では、弱視児に対して、保健体育科教育でいかに効果的にＩＣＴを活用し、学びを深めていくことができるかを検証していくことを主題として設定した。

第３分科会（生　活）

〇主体的に自己の力を発揮し、自立と協働を目指した指導
〇多様化した幼児児童生徒の社会参加に向けた支援のあり方

主体性を育てる生活指導の取り組み
～指導のつながり、広がりを考える～

北海道旭川盲学校　　専門寄宿舎指導員　穴田　義則　他

本研究は、全盲児童１名の具体的な生活場面に焦点を当て、２年計画で取り組んだ研究である。
舎生一人一人が自信をもって行うことのできる生活行為を増やすことが、より主体的に寄宿舎生活を送る力につながると考える。
①基礎となる力、概念の形成
②自ら考え行動する力
③目的をより良く達成するために工夫する力
をキーワードに、研修と実践を通して取り組んだ。

「個別の QOL 計画を活用した指導実践」
～寄宿舎における QOL、寄宿舎でできることとは何か～

岩手県立盛岡視覚支援学校　　寄宿舎指導員　簗田　幸治

本校寄宿舎には小学部から高等部専攻科の成人生徒まで在籍している。寄宿舎では、本人と保護者のニーズを踏まえた「個別の QOL 計画」を作成し、QOL の向上につながるよう支援をしている。生徒によって実態は大きく異なるが、異年齢集団の中での関わり方・活動の工夫により、本人の満足感や達成感が得られ、生活技術習得や自立に向けた今後の意欲などが「生活の質の向上」につながると考えられる。
本稿では、「寄宿舎では何をベースとして QOL 計画を作成し、評価するか」を念頭に実践した事例の中から２事例を取り上げ、「評価のあり方」や「寄宿舎でできることとは」について考えたことを報告したい。

自立と社会参加につながる力の育成
-身辺自立に向けて一人一人に応じた指導-

東京都立八王子盲学校　　寄宿舎指導員　矢口　直

本研究は、令和３年度の本校の研究実践をまとめたものである。基本的生活習慣を身に付ける途上にある４名の寄宿舎生を抽出し、より有効な指導方法を模索しつつ、

その実践をまとめたものである。３か月間の研究期間を設定し、視覚単一障害で経験不足から基本的生活習慣が確立されていないケースを想定した指導マニュアルを作成して適用したケースと、指導マニュアルは作成せず、寄宿舎生の実態や発達段階、課題をその都度職員間で協議しながら指導したケースをどちらも同時に実践した。指導マニュアルの適用による実践で得られた結果等を踏まえながら、マニュアルの有効性と各人への適用可能性を検証することにした。

一人一人の自立に向けた生活支援の在り方
～自己理解に基づく将来像への理解を通して～

富山県立富山視覚総合支援学校　　寄宿舎指導員　竹内　洋渡

本校寄宿舎では近年舎生数が減少し、障害は重度・重複化、多様化の傾向がみられる。一人一人の課題も様々だが、令和２年度までの実践では、特に、児童生徒が卒業後の将来像をイメージすることが難しいという課題が出ていた。

卒業後の将来像とは、一人一人の目指す自立した姿であり、その思いや目標の先にあるものである。そのため、まずは児童生徒が自己理解を深めて「現在地」を知り、次に「行先」となる将来の姿を具体的にイメージできるようになってほしいと考えた。

そこで、一人一人が自分らしく、豊かで充実した生活を送るための、自立に向けた生活支援の在り方について解明するため、「主体的・対話的で深い学び」の観点からも考察を加えつつ、令和３～４年度の２年計画にて取り組んだ、高等部Ａ生の実践研究について報告する。

本校ラジオ部の活動を通して
～主体的に自己の力を発揮できる場づくり～

大阪府立大阪北視覚支援学校　　寄宿舎指導員　髙橋　　昇　他

１　はじめに
ラジオ部設立の理由
他校の実践報告でのラジオ部の取り組み

２　目的
ラジオ部を創設し新しい取り組みを行うことで、寄宿舎生活をより充実したものにし、達成感を持たせ、新たな自分を発見する。

卒業後に生かせるスキルアップ
～対人コミュニケーションスキルの向上を目指す～

愛媛県立松山盲学校　　主任寄宿舎指導員　宮部　直人

令和元年から、自立へ向けた生活力の向上を重点テーマとして、寄宿舎全体の共通認識を深めながら実践を重ねてきた。その中で、卒業後の生活を充実させ、社会参加

を目指すために必要な知識や技能、コミュニケーション能力を身に付けることを目的とした取組を行った。ここでは、令和３年度から令和４年度までの取組について報告する。

卒業後の豊かな生活を見据えたコミュニケーション力を育む実践

熊本県立盲学校　　寄宿舎指導員　村上　豊作

本校寄宿舎では、令和元年度より「コミュニケーション力の育成」をテーマに、集団生活のあらゆる場面で寄宿舎生のコミュニケーション力を育むための研究・実践を行っている。

研究を始めた背景として、舎生間のコミュニケーションの取り方に違いが生じてきたことが挙げられる。10 年ほど前には自然に見られたお茶会も、近年は顔を合わせず電話やメールで済ませ、一人時間を満喫している舎生の姿が多く見られるようになったのも事実である。

また、中学部から高等部にかけた思春期の年代では、些細なことですれ違い、解決の手立てを見出せずに沈んだ気持ちで生活している者も少なくない。

実際に、私たちが周りの人とより良く関わるためのスキルとして、コミュニケーション能力がいかに大切かを実感するケースは多く、「観察する」「信頼関係を構築する」「傾聴する」「質問する」「共感する」「伝達する」等の力が求められている。

そこで、成人舎生が多く在籍していたかつての本校寄宿舎を回帰し、「異年齢の交流を積極的に行うことで、コミュニケーション力が育まれるのではないか」との仮説のもと、自治会（双葉会）の行事・活動をきっかけとした日常会話の広がりをめざした。

第４分科会（特別支援）

〇視覚特別支援学校(盲学校)における専門性の維持・向上
〇視覚障害教育におけるセンター的役割とネットワークづくり

道内の視覚に障がいのある幼児児童生徒への効果的な支援に向けた取組

北海道札幌視覚支援学校　　教諭　鈴木　敏弘

視覚に障がいのある幼児児童生徒への効果的な支援を行うためには、地域にいる視覚に障がいのある方々について、早い段階で把握することが必要である。そのためには、早期からの支援を行っている機関と広く連携を図ることが重要である。

しかし、本校の現状は、地域の関係機関に本校の学習活動が正しく伝わっておらず、また、その認知度も低いことが地域の保健センター、福祉課、ハローワークへの訪問等から明らかだった。現状を踏まえ、本校の教育及び地域支援に当たっての課題を次のとおり整理した。

（１）盲学校・視覚支援学校の地域における認知度・貢献度の低さに伴う課題
（２）在籍する幼児児童生徒の減少に伴う課題
（３）教職員の専門性の維持・向上に伴う課題

そこで、上記の課題解決を図るため、関係機関へ視覚障がい等に関する理解啓発活動や研修支援、先進的な取組を進めている盲学校・視覚支援学校の効果的な取組に係る情報収集、視覚障がい教育に携わる方々への研修会等を実施し、地域における認知度向上及び道内の視覚障がい教育に携わる教職員の専門性向上を目指した取組を行った。

地域で学ぶ幼児児童生徒への相談支援
～「地域支援センター　目の相談室　のびのび」の取り組み～

福島県立視覚支援学校　　教諭　高橋　英之

福島県は、県北、県中、県南、会津、南会津、相双、いわきという、７つの生活圏で人々が暮らしている。本校は、県内唯一の視覚支援学校であることから、各地区における視覚障がい教育に関する相談は、本校に集約されることとなる。本発表では、「地域支援センター　目の相談室　のびのび」の、地域で学ぶ幼児児童生徒への相談支援について報告する。

言葉の理解を目指した主体的な学びについて　～「おはなし」の時間を活用して～

長野県松本盲学校　　講師　布施　加奈子

本校幼小部は単一学級２名、重複学級４名の計６名である。早期教育の時から教師との 1 対１の個別学習で学習してきており、同年代の子どもとの関わりや集団活動の経験が不足している。集団遊びの中で習得しているであろう言葉の意味も、経験が少ないため曖昧なままで過ごしていると感じることが多い。また、見えない・見えにくいという障がいのために、言葉を聞いただけでは意味理解が難しく、不確かなまま過ごしている場面が多くみられる。

そこで、今まで教師のおすすめ本を紹介していた「おはなしの時間」を、子どもたちの主体的な学びにつながるよう内容を見直し、身近でよく使う「動作」のテーマを設定して、読み聞かせを行うようにした。絵本については子どもたちが興味のありそうな内容を、幼児児童の実態に応じて担任が選んだ。また、具体物に触れたり身体を動かしたりする活動を多く取り入れることを大切にしながら授業実践を行ってみた。

視覚障がいを有する乳幼児への早期支援　～アイアイ教室での取組～

岐阜県立岐阜盲学校　　教諭　森田　裕子

当校は、視覚障がい教育を担う岐阜県内唯一の特別支援学校として、視覚障がい支援部に「見え方の相談支援センター」を位置付け、視覚に障がいがあったり、見え方に心配があったりする乳幼児から大人の方までを対象に相談支援を行なっている。その中で早期支援については、乳幼児を対象とするアイアイ教室の開催や在籍園や療育センター等への訪問支援、当センターが主催する「目に関する相談会」との連携を図ることなどにより、子どもの育ちを保護者と職員が共有し、育ちを支えることを大切にして活動している。

ここでは、アイアイ教室の実践について報告する。

SDGs の活動を通して社会との繋がりを見据えた取組
－重複学級の生活単元学習での授業づくり－

京都府立盲学校　　教諭　嶋津　優菜

本研究は、高等部重複学級の生活単元学習の取組である。高等部卒業後、社会人となり積極的に社会と繋がるきっかけとして「持続可能な開発目標」（以下、SDGs）を主なテーマとして授業を行った。SDGs の「つくる責任、つかう責任」の観点から、ペットボトルを題材としたアップサイクルを通して校内から校外、身近な人から地域の人へと関わりを広げた取組や公共交通機関を利用した校外での取組を行った。また、生徒が主体的に活動に向かうことができるように個々の実態に合わせた教材教具等を使用し、自分からやってみようとする姿を期待した。

鳥取盲学校センター的機能の今とこれから

鳥取県立鳥取盲学校　　教諭　田村　真千子

本校は県内唯一、視覚障がい教育を担う特別支援学校で鳥取県の東部に位置している。令和５年度に創立 113 年を迎える。小学部、中学部、高等部普通科、高等部保健理療科、専攻科理療科を設置しており、現在小学部１名、高等部普通科７名、専攻科理療科１名が在籍している。うち重複障がい学級の生徒は３名である。寄宿舎を有しており、隣接する鳥取聾学校の生徒も入舎している。幼稚部の設置はない。

就学支援の仕組みが変わって 10 年が経過し、多様な学びの場の整備を、必要な支援は特別支援学校のセンター的機能の利用をというニーズが年々高まってきている。盲学校の児童生徒数の減少に伴い、少ない教職員での支援体制は困難さを感じることもある。特別支援教育コーディネーターとして４年間かかわっている立場で状況を整理し、よりよい支援の在り方について考察した。

本校における教育相談の取組　～サマースクールについて～

福岡県立福岡視覚特別支援学校　　教諭　末成　智子

本校はサマースクールとして、学期中に来校して個別に相談を受けている児童生徒が夏季休業中に集まり、小集団で見え方に配慮した運動や学習に取り組む活動を行ってきた。しかしながら、コロナ禍の影響で、令和３年度、４年度は対面での実施が難しくなり、オンラインでの実施を試みた。本発表では、コロナ禍前のサマースクールである令和元年度の実践と、コロナ禍のためオンラインで実施したサマースクールについて実施内容やアンケート結果を整理して検討し、サマースクールの意義と今後の在り方について報告する。

第５分科会（理　療）

〇理療教育における主体的・対話的で深い学びの実践
〇認定規則改正に伴う追加カリキュラムの指導上の課題と工夫
〇臨床実習における授業・事例研究
　～実習指導に苦慮する生徒への実践的指導を中心に～

実技指導におけるICT 活用の検討
ーはり実技動画教材作成等を通じてー

北海道札幌視覚支援学校　　教諭　高澤　史

iPadに代表されるタブレット端末は、持ち運びが便利な点やデータの受け渡しが簡単にできる等、非常に利便性が高く急速に普及してきている。さらに視覚障がい者にとっては資料の大きさや明るさ・白黒反転の調整が簡単にできる等、視覚補助具としても非常に有用であり、学習支援機器として活用する生徒も増えてきている。そこで、本研究ではタブレット端末を活用した学習に視点を当て、はり実技の動画教材作成を中心に実技指導におけるICT 機器の効果的な活用方法について検討した。

本校理療科の研究「地域医療の一端を担う有資格者としての資質向上を目指して」
～　主体的･対話的で深い学びの実現に向けて　～

千葉県立千葉盲学校　　教諭　岩本　省博

本校では 2018 年度より「視覚障害教育における主体的・対話的で深い学びの実現」を研究主題として４年間かけて研究に取り組んだ。

それを受けて理療科では「地域医療の一端を担う有資格者としての資質向上を目指して」を研究主題に設定して、研究に取り組んだ。

主体的な学習を支援するための教材作成の取組と、その作成した「整形外科学的徒手検査法マニュアル」（以下「徒手検査法マニュアル」）を活用した理学療法実技の指導実践について研究授業を通じて協議した。

また年度末に実施した「学習状況及び教材活用アンケート」の結果を踏まえて、生徒の学習の取り組み状況から生徒の自己学習における課題や今後の教材作成の在り方について考察した。

理療教育で共有、発展できる教材作成と科目横断的な授業展開
～臨床医学を中核として～

長野県松本盲学校　　教諭　中澤　公博

近年、鍼灸マッサージ師には医学的に幅広い知識や高い臨床能力、応用力が求められている。しかし、理療教育は口承や文字による伝達が主となり、内容が正確に伝わらず派生してしまったり、生徒が自己流や形だけの施術を行ってしまったりする状況がある。本研究では基礎から応用に段階を移行する 2 年次の学習について注目したが、理学検査術式と知識を結び付ける応用的学習は、指導課程の後半にならざるを得ない。また、以前グループ研究で試作された理学検査術式は、課題が多く、コロナ禍や生徒数の減少により、生徒同士が直接切磋琢磨できる環境が整っていなかった。更に指導教員の技術のみが模範例となるため教員の技術の差異が問題となってしまった。

これらの課題に対処するため、本研究では試作された理学検査術式を PDCA サイクル及びグループ個々人の特長を生かした協働で最良なものに改善し、「主体的・対話的で深い学び」を観点としたカリキュラムマネジメントを視野に入れた科目横断的な授業を展開した。また、以前から理療教育に効果的なアプリの検索とリストの更新を進め、近年解剖学や臨床医学総論の領域に重点を置いたアプリや画像を活用した様々な授業を展開してきた。これらの継続したアプローチを報告する。

理療教育のための３Ｄプリンタによる立体模型教材の製作とその活用

愛知県立名古屋盲学校　　教諭　細川　陽一

視覚障害生徒が人体の構造を理解するには、生徒同士の体や解剖模型を触察して、その形態や動きを観察することが有効である。そこで 3D プリンタを用いて、理療科用の立体模型を製作することを検討した。今回、舌診模型の製作とこれを用いた練習問題の解答、及び臨床実習での模擬患者の病証把握についての実践について報告する。

はり実技における経穴学習の動機づけ

奈良県立盲学校　　教諭　北村　穣

本校の専攻科理療科のカリキュラムでは、経絡経穴概論を１年次に学習することとなっている。生徒は経穴を学習するにつれて、「経穴はとにかく暗記科目」という認識になっていくようである。馴染みのない難しい漢字や学習途中の解剖学的用語が並び生徒からは「とっつきにくい」という声が聞かれる。また、経穴の有効性についても、先人の経験の積み重ねであり神秘的であると感じつつも、東洋医学概論は未学習であり、その根拠に釈然としないといった様子もうかがえる。

社会的には、あはき師の資質向上を目指し国家試験の見直しが行われ、令和２年度第 29 回あんま・はり・きゅう国家試験より問題数が増加した。とりわけ経穴の問題数が以前より増え、さらに臨床的な西洋医学と東洋医学の知識が求められている。しかし、基本的な知識の定着がなければ国家試験を突破するのは難しく、１年次で学習

する内容の積み重ねが重要である。
　このような現状を踏まえて、専攻科理療科２年次におけるはり実技の授業において、経穴を継続的に学習しようとする動機づけを目的とした取組について報告する。

岡山盲学校理療科における主体的・対話的で深い学びに関する取り組み

岡山県立岡山盲学校　　教諭　土川　知義

　新学習指導要領に示されている「主体的、対話的で深い学び」を研究テーマとして、令和元年度からの３年間に研究授業や公開授業を通して取り組みを進め、校内研究の成果のまとめを作成した。この取り組みにより指導力向上につながる手応えを得ることができた。また、この研究テーマが意図する内容や目指すものの具体例を考え、実践する中で見えてくる課題もあった。今回の研究では、こうした本校理療科の取り組みについて振り返り、そこで表れた課題から今後に繋がる手がかりについて考察した。

「コミュニケーションに対する意識の変化について」
～非言語的コミュニケーションを中心に～

佐賀県立盲学校　　教諭　坂之下　一郎

　本校では平成３１年度から新カリキュラムに基づき、専攻科理療科２年生を対象にコミュニケーション概論を週１時間指導している。一般的に非言語的コミュニケーションの果たす役割は非常に大きく、視覚障害者であっても非言語的コミュニケーションに関する技法の理解は避けて通ることができない。本研究ではコミュニケーション概論の授業を通じてコミュニケーションに対する意識がどのように変化したかを探る。